

東洋文庫書報 第四七号 抜刷

平成二八年(二〇一六)三月

東洋文庫蔵「六家文選」二部について

千葉仁美

東洋文庫蔵「六家文選」二部について

千葉 仁美

一、はじめに

東洋文庫に所蔵される漢籍のうち、「六家文選」は二部を見出すことができる。この二部は、『漢籍分類目録集部 東洋文庫之部』（昭和四十二年）によれば、以下の通りである。

〔XI-31A-d-55〕 六家文選六十卷 二十冊 小田切万寿之助舊蔵

梁昭明太子蕭統輯 唐李善呂延濟劉良張銑李周翰呂向注

明嘉靖十三年至二十八年呉郡袁氏嘉趣堂用宋蜀本景刊

〔XI-31A-d-2〕 六家文選六十卷 二十冊

梁昭明太子蕭統輯 唐李善呂延濟劉良張銑李周翰呂向注

明嘉靖十三年至二十八年呉郡袁氏嘉趣堂用宋蜀本景刊

目録上、右の二本は全く同じ本として取り扱われている。しかし、実際には、右の二部は別版の「六家文選」である。

本稿では、右の二部について、その書誌とともに相違と問題点とを指摘するものである。

二、「六家文選」について

「文選」は、梁に成立して以来様々な注が行われた。その中でも代表的なものが、唐・顯慶三年（六五八）の李善注、開元六年（七一八）の五臣注、これらを併せた宋・大中祥符九年（一〇一六）の六臣注である。これらの諸本は、出版技術の発展に伴って版木に上り、その数は清代までに数百を数えるという^①。「文選」研究の大家・斯波六郎氏は、その著書『文選諸本の研究』に於いて、文選諸本を以下の三種に大別している。（一）李善単注本（二）五臣李善注本（三）李善五臣注本がそれである。このうち、（二）は五臣注を前、李善注を後ろに付す形をとるもので、ここでいう六家注文選がこれにあたる。一方、李善注を前に出し五臣注を後ろに配置するのが（三）であって、これは六臣注文選とも言われる。斯波氏は同著で、六家文選に属する諸本として以下のものを挙げる。

宋・明州刊本、明・袁褱仿宋刊本、明・丁觀重刊本、宋・張守校正と題する本（其の實、明代商估の贗を售れるもの）、日本慶長活字本、日本寛永本

この内、明州刊本が最も古く、これに次ぐのが袁褱刊本である。袁褱刊本は六家文選の覆宋本であるが、その雕刻精善なることが知られており、斯波氏も、「決して他の明刊本と同一視すべきではない。」と評しておられる。丁觀重刊本は袁褱刊本を覆刻したものであるが、重刊の折毎半丁十一行を十行に減ずる等体裁を改めており、書面を見れば直

ちにこれが袁褰刊本であるか丁覲重刊本であるかが判別できる。しかし、この二本は混同され易く、丁覲重刊本は袁褰刊本と見誤られること甚だ多い。加之、張守校正本は、斯波氏の指摘する如く、宋本と偽造された丁覲重刊本なのである。⁽³⁾以上の如く、袁褰刊本以下の「六家文選」を取り巻く状況は複雑であり、これらの刊印を区別する際には、それぞれの特徴に留意する必要がある。

三、東洋文庫蔵「六家文選」の書誌

さて、目録を鑑みれば、東洋文庫に蔵される文選は「六家文選」であり、袁褰刊本である。しかし、前述のとおり、所蔵の二本はそれぞれ異なる書誌学的特徴を有している。今、論者による書誌を挙げれば、以下の通りである。

①〔X13-A1d-55〕三十冊九帙

帙題簽「六家文選 吳郡袁氏刊 凡捌函壹」

表紙 無題

二八・七 cm × 二二・〇 cm 匡郭内二四・〇 cm × 一八・七 cm 界幅一・六 cm

四ツ目綴 每半丁十一行十八字双行注每行二十六字 天地单边左右双边

版心 白口無魚尾 「文選一卷／丁数／（刻工名）」

下象鼻刻工名 徐敦、淮、楊久安等

②〔XI-3-A-d-2〕三十冊三帙

帙題簽「影宋本六家文選 嘉靖刊本 上」

表紙 書題簽（打付書）「影宋本六家文選」

二九・五cm×一九・〇cm 匡郭内二二・八cm×一六・五cm 界幅一・五cm

五ツ目康熙綴 每半丁十行十八字双行注每行二十六字 四周单边

版心 白口無魚尾 「文選一卷／丁数／（刻工名）」

下象鼻刻工名 劉山、張小四、罗帝、丘、明、楊玖安、葉杰、葉松、陳富等

卷第六十末に小池桓識語（安永七年）⁽⁴⁾

右の書誌を見れば、①本と②本とでは、匡郭内の大きさ、每半丁の行数、匡郭（前頁太字箇所）に相違があり、それぞれは版木を異にするものであることが分かる。これらの特徴を、斯波氏の挙げる袁裝刊本・丁觀重刊本の両本と比較すると、①本は袁裝刊本、②本は丁觀重刊本に各々一致する⁽⁵⁾。

さらに、両本は序の構成は変わらないものの、每巻頭の題辭が異なっている。

①〔XI-3-A-d-55〕

(第一行) 六家文選卷第某

(第二行) (七字空格) 梁昭明太子撰

(第三行) (八字空格) 唐五臣注

(第四行) (同) 崇賢館直学士李善注

② (X13A1d2)

(第一行) 六家文選卷第某

(第二行) (三字空格) 梁昭明太子撰

(第三行) (同) 唐李善呂延濟劉良張銑李周翰呂向註

(第四行) (二字空格) 皇明 (十二字空格) 重刊

各卷、第三行と第四行が異なる。①本は斯波氏の挙げる袁褰刊本と一致する。しかし、②本について、斯波氏は丁観重刊本の特徴を以下の様に指摘している。

每卷第一行「六家文選卷第幾」、第二行「梁昭明太子撰」、第三行「唐李善呂延濟劉良張銑李周翰呂向註」、第四行「皇明龍苑丁観重刊」と題す。

斯波氏の目録にかかる丁観重刊本は神宮文庫本である。『神宮文庫漢籍善本解題』(長澤規矩也篇、昭和四十一年)によれば、②本と同じ匡郭、行数、字数の特徴をもつ同板と確認できる。『解題』によれば、第四行「皇明(空格)重

刊」の文字、神宮文庫本は「皇明空格八字重刊」とあるに対して、②本は「龍髯丁覲」の四字無く、ただ「皇明（空格十二字）重刊」とあるのみである。この点につき、『文選版本擷英』（貴州人民出版社、二〇〇五）は、「丁覲重刻六家文選六十卷」を挙げて、「丁氏《善本書室藏書志》誤作「袁氏做宋刊本」者。不知此本乃就丁覲本作偽、首葉第四行剗去「龍髯丁覲」四字、非唯不是袁本、亦非丁覲原刊也。」と指摘しており、丁覲重刊本は袁裝刊本に誤られ易いこと、刪去のある本はまた丁覲重刊本の原刊でないことを示している。また、磯部彰氏藏本は、第四行を「皇明（空格）重刊」として、②本と特徴を一とする。これらを鑑みるに、斯波氏の見た神宮文庫本は丁覲重刊本の原刻本であり、②本並びに磯部氏藏本は、神宮文庫本より遅れる後印本であろう。管見の及ぶ限り、日本に現存する丁覲重刊本は五本である。東洋文庫藏本が諸本間のどこに位置づけられるかは、一概に述べる事は出来ないが、「龍髯丁覲」字刪去の問題から、磯部氏藏本に近い一本であると言えよう。しかし、磯部氏藏本との相違点も看過できない。それは、各卷末に表記される標識⁸が一致しないという問題である。

袁裝刊本は、各卷末にそれぞれ異なる標識を持っており、後印になるに従って標識が刪去されるということが、諸本間の比較で明らかになっている。『明代版本図録』（民国叢書第五編百、上海書店、一九九六）には、袁裝刊本について「按此爲袁刻最初印本各卷後牌記俱全後印本漸次剗去」と簡潔に指摘される通りである。①本については後に述べるとして、では、②本の跋文はどうであろうか。磯部氏藏本と比較すれば、以下のようである。

②〔XI 3-A 1-2〕標識

卷第三十一「皇明嘉靖壬寅四月立夏日／吳郡袁氏兩唐草堂善本彫」

卷第四十一「此蜀郡廣都縣裴氏善本今重彫于汝郡袁氏之嘉趣堂嘉靖丙午喜日／
（二行後）國朝改廣都縣為雙流縣屬／成都府」

卷第五十二「母昭裔貧時常借文選不得發／憤曰異日若貴當板鏤之以遺學／

者後至宰相遂踐其言〈出揮塵／錄〉」

卷第五十六「戊申孟夏十三日李清雕」

卷第六十一「余家藏書百年見購鬻宋刻本昭明／文選有五臣六臣李善本巾箱白／文小字大字殆爲十種家有此本甚稱精善／而注釋本以錄家為優因命工翻雕匡／郭字體未少改易刻始于嘉靖甲午歲／成于巳酉計十六載而完用費／浩繁梓人艱集令模榻傳播海間／覽茲冊者母徒曰開巷快然也／皇明嘉靖巳酉春書具厚十六日吳郡汝南／袁生裝題于嘉趣堂」

〈 〉内は割注

右に挙げた標識のうち、磯部氏の報告では、卷第三十と卷第四十の標識について言及なく、氏の蔵本にこの標識が付されていないのか、単に言及されておられないだけなのかは分からないが、丁觀重刊本の標識も諸本の摺刷前後を判断する基準として、「龍豨丁觀」字の有無とともに、検討の余地があるものと思われる。

では、①本における各巻標識の有無はどうであろうか。今回調査したところによれば、①本の各巻末における標識は、末葉が切除されている巻が多い。末葉が切り取られている箇所には別の紙が継がれており、もとの標識が失われた状態である。だが、一部ではあるものの、原紙の残る巻が存する。もとの紙を有している巻の跋の有無を、袁裝刊本の原刻本とされる国立公文書館蔵本⁹⁾によって比較すると、以下の通りとなる。

①〔XI 3 A d 55〕標識

卷第十六—卷第十八、卷第三十六 無

卷第四十一 (卷末「六家文選卷第四十二」下) (四字格)「葺亭」補筆有¹⁰⁾

卷第四十二 無

卷第四十四 無

卷第四十五 無

卷第五十二 (同丁觀刊本)

卷第六十 「吳郡袁氏善本新雕」

〔公文書館本〕標識

卷第一—第十九、卷第二十一—二十九、卷第三十一、卷第三十六、卷第五十三、卷第五十七 無

卷第四十一 (「六家文選卷第四十二」下) (四字格)「葺亭」／「付押板十四片陸板五片」／「嘉靖丁未三月吳

趨陸潮雕羅模」

卷第四十二 「嘉靖丁未春二月羅模」

卷第四十四 「丁未六月初八月李宗信雕」

卷第四十五 「丁未歲六月望 羅模」

卷第五十二 (同丁觀刊本)

卷第六十 「呉郡袁氏善本新雕」

袁氏跋文（同丁觀刊本）

①本では、卷第六十に付される袁氏跋文がない。右に挙げた丁觀重刊本は全てこの袁氏跋文を持つものの、②本はこの跋がないので、恐らく、旧蔵者が何某かの意思を以て改変したのではあるまいか。僅かに遺された痕跡として、原刻本に跋文があり、①本は原紙で無跋の箇所は、卷第四十一―卷第四十五に集中している。特に、卷第四十四に見える「李宗信」は下象鼻に見える刻工名と一致し、これらの標識が刻工による模刻の年月を記すものと推察される。さらに、卷第四十一の標識は、①本、卷末標題下の「蔵亭」二文字を残し、その後二行は原紙が失われている。公文書館本は「付押板十四片陸板五片」／「嘉靖丁未三月呉趨陸潮刻羅模」の二行を有しており、①本の原紙がこの二行を有していたかは知られないが、この点について、国会図書館蔵本の同箇所が復元の一助となる。

国会図書館蔵本は袁褫刊本であり、その全文がデジタルアーカイブによって公開されている。国会図書館蔵本は、①本に同じく、卷第四十一、卷第四十四、卷第四十五の標識を有しない。加之、国会図書館蔵本の卷第四十一末葉は、原紙を保っているものの、①本に同じく卷末の標題下の「蔵亭」のみを有し、後二行の標識がない。ただし、国会図書館蔵本には、卷第四十四に、僅かながら「丁未六月初八月李宗信雕」の文字が存し、国会図書館蔵本よりも後印になると思われる。したがって、①本は、袁褫刊本（原刻本）の後印本であり、国会図書館蔵本より後の摺刷にかかると言えよう。①本は、各卷末の標識の大部分が切除されているという点において、袁褫刊本諸本との前後関係が

掴みにくい。右は管見に入った諸本の間での考察であるが、現存諸本の間で更に詳細に調査すれば、袁褱刊本の摺刷の前後を知ることが決して困難ではあるまい。

四、おわりに

阿部隆一氏は、丁観重刊本につき以下の通り述べる。^①

本版は精善なる覆宋本として有名な袁氏嘉趣堂本の覆刻で、(中略)恐らく萬曆頃の翻刊と思われ、撫刻甚だ劣る。しかし往々袁氏原刻本と誤認されていることが多い。

前述の通り、中国における書誌学に於いても、袁褱刊本・丁観重刊本兩種の混同は珍しくなく、この「六家文選」版本二種を取り扱うには十分な注意が必要である。但し、冒頭で述べたように、両者の違いは、一見すれば明らかでもない。今回、両本の書誌を検討する機会を与えられ、先行研究を踏まえながら両者の相異を簡略ながら概観した。袁褱刊本・丁観重刊本兩種をひとところに所蔵する機関は、関東では東洋文庫のみである。実際に兩種を相較べることができる貴重な場であると言えるだろう。

《参考文献》

斯波六郎『文選諸本の研究』斯波博士退官記念事業会、一九五七

- 神鷹徳治「六家文選丁覲重刊本について」『中国文化論争』一、帝塚山学院大学中国文化研究会 一九九二・三
- 磯辺彰「〔附録Ⅲ〕袁袞倣宋刊六家文選系の版本一種」『東アジア典籍文化研究』塙書房、二〇一三
- 辻直四郎篇『漢籍分類目録集部 東洋文庫之部』一九六七
- 広島大学附属図書館『広島大学斯波文庫漢籍目録』一九九九
- 長澤規矩也篇『神宮文庫漢籍善本解題』一九六六
- 無窮会篇『天淵文庫藏書目録』汲古書院、一九六四
- 潘承弼篇『明代版本図録』（民国叢書第五編百）上海書店、一九九六
- 范志新篇『文選版本擷英』貴州人民出版社、二〇〇五
- 阿部隆一『増訂中国訪書志』汲古書院、一九八三

注

- (1) 斯波氏『文選諸本の研究』に、「(略) 爾後宋に至つての刊行漸く多く、元・明を経て清に迄るまでに出た板本の種類は、無慮數十百に上らう。」とある。
- (2) ただし、明州刊本は袁袞刊本の祖とは認められないため、ここでは紹介するに留める。
- (3) 斯波氏家藏本。丁覲重刊本の每巻第四行「皇明龍髯丁覲重刊」を、「皇宋紹興二年子固張守校正重刊」に偽造するもの。
『広島大学斯波文庫漢籍目録』に書影がある。
- (4) 小池桓（崑岡、子珪）、伝不詳だが、和刻本の『明氏朝鮮傳』（宝暦十一年、木村理兵衛等）點、『中国正統図春秋地図』

(刊年不明、永田調兵衛等) 校に名が見える。前者は、長澤規矩也篇『和刻本正史 諸史抄』(汲古書院、一九七三) に影印されている。

(5) 刻工名について、斯波氏の指摘や諸本の袁褰刊本・丁觀重刊本の各々に合致したが、袁褰刊本の刻工名は、後述する公文書館本よりも少ない。②本が袁褰刊本の後印本と言える論拠となるが、ここでは右の指摘に留める。

(6) 「附録Ⅲ」袁褰倣宋刊大家文選系の版本一種」(『東アジア典籍文化研究』塙書房、二〇一三) に紹介される。

(7) 東洋文庫本(②本)、斯波文庫本(張守校正本。注3参照)、神宮文庫本、高知大学本、天淵文庫本。このうち、神宮文庫本は袁褰刊本とともに蔵し、『神宮文庫漢籍善本解題』に詳しい書誌がある。高地大学本は『小島文庫目録』に「明丁觀重刊本」とある。天淵文庫本は、『天淵文庫藏書目録』に「明嘉靖壬寅吳郡袁氏」とあるが、神鷹徳治氏によれば、「龍巖丁觀」删去があり、丁觀重刊本であるという。(『六家文選丁觀刊本について』『文選諸本の研究』補正(二)——『中国文化論争』一、帝塚山学院大学中国文化研究会、一九九二・三)

(8) 諸家により「刊記」「後牌記」等異なる表現が用いられているが、ここでは斯波氏に従う。

(9) 斯波氏は、袁褰刊本として静嘉堂文庫本を挙げ、『天祿琳琅書目』にある原刻本と同板とした上で、更に公文書館蔵本・京都大学人文科学研究所蔵本を同じく原刻本としている。前者について、論者の調査したところによれば、斯波氏の挙げる静嘉堂文庫蔵本の標識より多くの標識を持っており、むしろ公文書館本が原刻本ではないかと思われる。磯部氏、神鷹氏も指摘しているところであるが、この点については、稿を改めて述べたい。

(10) 「蔵亭」二字、版末で捺された文字の上から、墨筆で僅かに體を整えられた痕跡が見える。

(11) 阿部隆一『増訂中国訪書志』汲古書院、一九八三

(明治大学大学院文学研究科・博士後期課程)